

離婚しない女

連城三紀彦

離婚しない女

連城三紀彦

文藝春秋

離婚しない女 奥付

昭和六十一年九月十日 第一刷
昭和六十一年九月三十日 第二刷

定価 九〇〇円

著者 連城三紀彦れんじょうきひこ

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二
電話東京(〇三)二六五局一二二一

印刷 大日本印刷 製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Mikihiko Renjō 1986

Printed in Japan

ISBN4-16-309200-5

離婚しない女〈目次〉

離婚しない女

7

写し絵の女

153

植民地の女

175

装幀——村上みどり

作品集

離婚しない女

離婚しない女

第一部

離婚しない女

鷗が騒いでいた。

夜の明ける前だというのに何故だろう……

岬につながる柵の門の端に停めた車の中で、ハンドルに顔を埋め、眠るような恰好で私はそんなことを考えていた。

四時五十一分。

フロントガラスをまだ暗い夜が覆っている。

フロントガラスだけではなかった。車を、私の体を、夜は深い闇で飲みこんでいた。視界の閉ざされた闇の中で、車の時計の夜光の針だけが、溶けそうに弱い緑色で浮かんでいる。秒針の音が、そんな凍りつき動かすこともできないほどに固まった闇の中にも流れている時間を探りだし、ゆっくりと刻んでいく……四時五十二分。三月二十二日四時五十二分。

その時刻、まだ雪も風もなかった。北国の冬の夜とは信じられないほど静かだった。波の音もなかった。どのみちこの門から岬までは果てしなく長く木の道が続いているのだが、それでもあの、岩が煙のように湧きあがった断崖だんがいには、夏のどんなに海が凪ないでいる時でさえ、波は凄まじいしぶきをあげてぶつかり、その音を遠くまで伝えるというのに——冬の夜は安らかな眠りのように静かだった。それなのに何故鷗だけが騒いでいるのだろうか

……

四時五十三分。

この静かさも、だが、もうすぐ終わるだろう。

「夜明け頃に吹雪き始める。それまでに死体を岬の先端まで運ばなければならない」

五時間前、根室を出る際に、男が念を押すように囁いた言葉が耳に蘇よみがえってくる。五時間前、私たち三人はこの車に乗り根室を出発した。家の前で車に乗りこんだ時、私の位置は

助手席だった。乗ろうとして助手席のドアの把手を握った時、後席に乗りこもうとした男が不意に耳もとへ口を寄せてきてそう囁いたのだった。

それだけを囁き、後席に乗りこんで深々と座り、目を閉じながら、運転席の二時間後には殺すことになっている男にむけて、

「むこうへ着くまで眠らせてもらう。昨夜もあまり眠っていないから、少し疲れている」
何事もないように呟いた。

暗い声だったが、この男の声はいつも暗いから、その底にあったいつもとは違う掠れたような響きを、私でさえただ疲れているせいなのだと思うところだった。男は眠ったふりをしていたのではない。車が根室の街を離れる時には、もう深い寝息が聞こえていた。

そうして五時間後、何もかもが終わり、私たち三人は根室を出た時とはそれぞれ違う位置に座っていた。四時五十六分。そう、その時刻には停まった車の中にまだ私たちは三人でいた。

私と夫と、もう一人の男と――

助手席からかすかな寝息が聞こえてくる。岩谷啓一。私より二つか三つ年下だから三十三か四のはずである。根室市のはずれにある気象サービス・センターに勤めている。だが、

私の知っているのはそれだけだ。どのみち、私は男がどんな暮しをし、どんな過去をもっているか、何も興味がなかった。闇の中から響いてくるかすかな寢息にも感じとれる、他の誰も、私だけしか感じとれない古い油のような、^す饅えた体臭が、すべてだったのだから。後席には山川が横たわっていた。山川正作。四十六歳、あと二日が過ぎ、本当なら四十七歳になって死ぬはずだったが、誕生日の晩には急な用ができたからと言って、啓一との釣りの約束を急に今日に変更してくれと言いだしたのだった。たぶん、あの若い女の所で誕生日を祝うことに決めたのだろう。五十に近い男の誕生日を祝うなどというのは、あんなまだ幼いような小娘にしか思いつかないことなのだから――。

十年間、夫であり、一度として夫だったことのない男だった。

水産会社社長としての地位、根室市のはずれにある豪邸、三台の車――私が山川に感じていた魅力は全部、金に換算できるものだったし、その金額だけが、私たちが夫婦だった理由なのだから。十年前、釧路のホテルのフロントにいた私が、時々根室から遊びに出てきては泊^{うやす}っていく自分より一回り年上の男の求婚に肯いたのもそれだけが理由だったのだから。四時五十七分。

私は後席にもうただの死骸となって横たわっているその男のことを、一度でも夫と呼ん

だことがあつただろうかと考えた。一度もなかったはずだ。他人にも「山川」とか「社長」とか言ったことしかないし、胸の中でも山川と呼び棄てにしていた。

山川はよく、自分がまだ船に乗っていた若い頃、どんなに遅い、引き締ったいい体をしていたかを自慢していた。広い肩幅にだけは、その片鱗が残っていたが、十年間、山川に抱かれる度に、私は一体この体のどこにそんな遠い昔の若さを探りあてたらいいのだろうと胸の中でむなしく呟き続けてきた。

肉のたるんでいるだけの肥った醜い体には、私の年齢と見合う若さは何一つなかったのだ。

四時五十八分。

その肥った体は、後席を圧するように占領しているはずなのに、私の背はただ、空白のような虚ろな闇を感じとっているだけだった。

静かだった。

その静かな体が、まだ五時間前、根室の街を出る時には、あんな陽気な声をあげていたのが信じられなかった。私が男たち二人の釣りについて行くと言ったのが嬉しかったのか、それともあの酒場の女とのことがうまくいっていたからなのか、上機嫌な笑い声をあげな

がら、喋り^{しゃべ}り続けた。

何を喋っていたのかわからない。岩場とか波とかいう言葉を憶えているから、その岬での釣りがどんなに楽しいかを夢中で喋っていたのだろうが、いつものように私は山川が喋り始めるとすぐに他のことを考え始めたのだから。がさつな声だった。十年間聞き慣れた、聞き飽きた声だった。私は、啓一が本当に疲れているのなら、今のうちに充分眠らせておいたほうがいいと考えたので、そのがさつな声が啓一を起こしてしまわないか、そのことだけを心配しながら、あと二時間もすれば、その声ともう別れることができるのだと、必死に言い聞かせていた。

実際には三時間半かかった。途中でダンプのスリップ事故があり、その処理のために一時間近く通行止めになったのだった。啓一は、車が国道を外れ、山道を上り始めてもまだ目を覚まさなかった。やっと目を覚ましたのは、ライトがこの門の柵を浮かびあがらせ、停車するほんの二、三秒前のことだった。

「一時間ほど遅れたわ」

私はすぐにそう声をかけたが、啓一は何の言葉も返さなかった。一時間ぐらいの狂いは何ともないと言いたげだった。